第三章　擦文・オホーツク文化

第一節　北海道の古代

第一項　南と北の文化流入と文化変様

本州では六世紀から七世紀にかけて、寺院の建設など大きな社会組織の変化とともに、新文化、むしろ文明の影響が強まり、十七条の憲法の制定など古代国家の形成を迎える。周囲の諸国家との交流も深まり、急速な文化変化が進行する。古墳時代の終りがほぼ六世紀、仏教寺院が多く造られる飛鳥時代が七世紀、平城宮という奈良の都が栄えたのが八世紀、京都に都が移り、それから鎌倉時代が始まるまでが平安時代で、この頃までを古代と言っている。千歳市内の遺跡からはこれらの時代を示す色々な遺物が発見されている。平安時代の土器や貨幣、奈良時代の土器や刀、飛鳥時代の土器など本州で発見されるのと同様のものが認められる。また発掘された住居の様子も似ている。

このような本州の古代の遺物が北海道の考古学的な発掘で注意され、組織的な研究が始まったのが昭和六年の江別市旧江別兵村と千歳市千歳神社裏遺跡の調査であった。この千歳神社裏遺跡の調査で出土した土器が擦文土器と報告され、全国的に擦文土器の名称が定着することになった。これらの遺跡の調査には、河野広道、名取武光、後藤寿一、高倉新一郎等がかかわっていた。そこへ本州から喜田貞吉、杉山壽栄男、後藤守一等が調査に参加して大々的に結果が報告された。さらに千歳神社裏遺跡を報告した河野は東京大学の八幡一郎と連絡をとりあっていた。考古学も出土遺物や遺跡について夢想・空想的な話をする段階から、証拠に基づいて妥当と判断される結果を尊重する科学的な態度を示すように転換することとなった。

北海道ではこの時期に擦文土器とオホーツク土器の時代となる。大陸では靺鞨が所属していた高句麗が中国の隋に攻められ、また唐に攻撃されるという状況から、靺鞨も自立を図るか、新たな新羅などに所属を変えるか、また戦火をのがれて日本へ向かうなどの動きを余儀なくされたらしい。欽明天皇五年に佐渡に粛慎が来たことが記録されている。日本書紀に記された「粛慎」は靺鞨のことで、どちらも訓では「あしはせ」と読んでいた（寺島一七一二、児島一九八四）。北海道に来た靺鞨は、中国では「莫設靺鞨」（通典）、「莫曳皆靺鞨」（唐会要）、「莫曳靺鞨」（新唐書）と記されていたと和田清は考えている。七世紀の前半頃のことである。当時の日本側では、それを日本書紀では「粛慎国」、続日本紀と多賀城碑では「靺鞨国」と記していたと考えられていて、その人々の考古学的な遺跡はオホーツク文化の遺跡とみなされている。

擦文文化は続縄文文化の南半の人々によって形成され、オホーツク文化には続縄文文化の北半の人々が関わっていたようである。それぞれの文化の形成過程には違いがあるように思われる。今それぞれの時期区分の指標となる土器について述べることとする。北大式の土器は、土師器の文化の影響により、縄文を失い沈線文による施文を主体にした土器を形成する。道北の北大式は、サハリン系の鈴谷式の影響により、縄文を失い、沈線や刻文を主体にした土器を形成する。南部では擦文、北部ではオホーツク式と呼ばれるのだが、両者ともに外反した口縁部に円形刺突文を巡らせる北大式から受け継いだ共通の特徴を保持している。この時期を擦文・オホーツク文化の初頭とする。やがて初期の擦文土器は土師器あるいはそれに伴う擦文土器へと変遷し、オホーツク式の初期の刻文土器は貼付浮文土器へ移行する。土師器と貼付浮文土器には共に蕨手刀を伴う。この時期までを

前期とする。土師器と貼付浮文土器の時期が前期後半に相当する。その後、千歳地方では本州から渡来したロクロ製の土師器・須恵器が擦文土器に伴う中期となる。この中期中ごろに白頭山・苫小牧火山灰（町田他一九八一）が認められ、この一〇世紀中頃の火山灰の上下で土器の特徴が変化する傾向があり、中期の前半と後半に相当するようである。中期の土器には横線が多数認められるのであるが、後期にはそれがなくなる。後期の土器にも綾杉文が多く施文される前半期と細い沈線による鋸歯文等の施文が特徴的な後半期とに区分される。このように擦文・オホーツク文化の全体を前中後の三期に区分し各期を前後に二分して計六期としてその変遷を考えることとする（図３－１、大沼一九九六ｂ）。

道北では中期にオホーツク式から変化した元地式、道東では中期から後期前半にかけてオホーツク式の系譜を引くトビニタイ式が認められ、擦文土器と共存する。

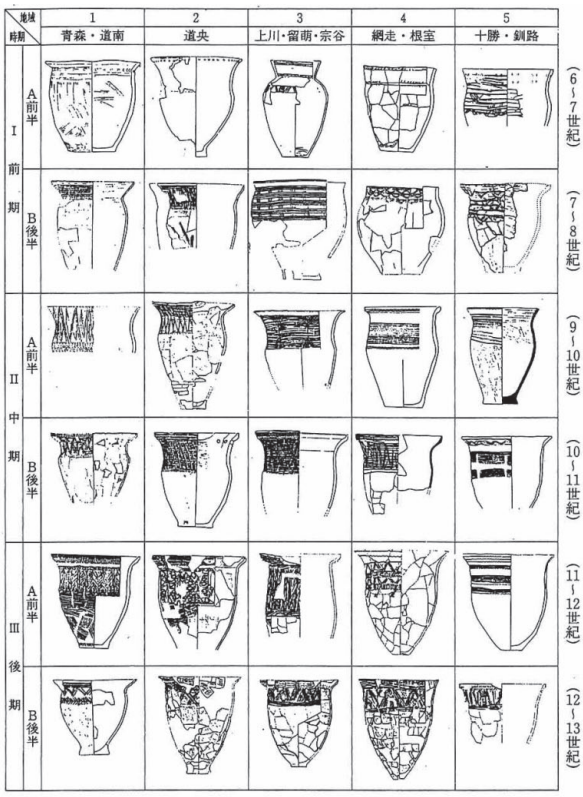


図３－１　擦文・オホーツク土器の変遷
（「擦文・オホーツク文化と北方社会」月刊『考古学ジャーナル』12№411より）

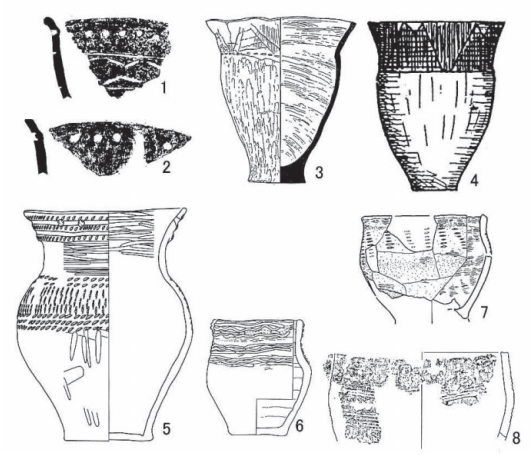
擦文・オホーツク文化の時代は、北海道に住む人々が南と北に分離を余儀なくされた前期前半の状況から地域的にさまざまな経過をたどりながら、後期後半には再び共通の文化を持つようになり、中世へと移行してゆくまでの時代である。

第二項　擦文前期の文化

初期の擦文土器については、長らく資料が不足していて、近年になってやや理解が深められた情況である。一九三七年には後藤寿一が北大式を紹介して、擦文初期の土器へ言及していた（後藤一九三七）。名取、河野による北海道の土器の解説でも触れられていたのだが（名取一九三九、河野一九五九）、一九六二年に名取武光・峰山巌が一九五三年に発掘した資料を提示して、擦文式土器Ａ型と報告するまで広く知られるにはいたらなかった（名取・峰山一九六二）。内瘤文と単独幾何学文は擦文Ａの装飾文をなすとみなされていた（峰山一九六三）が、この時点では恵山式との区分等に不備があった。その後、発足岩陰（竹田一九六三）、天内山遺跡（余市町教委一九七一）等から類例が出土したが、出土例が少なく十分な理解が進まない状況にあった。一九七七年以降各地で報告がなされるようになり、改めて検討する機運が生じた。明治七年に十勝茂寄（現在の広尾町）から出土した擦文文化前期前半期に属する完形土器が市立函館博物館に保存されていて、一九二五年と一九三三年、さらに一九五七年には海外にも紹介されている（Kidder 1957）ことからこの類の土器を十勝茂寄式と称し、解明を進めようとしている（大沼一九七七・一九九六ａ）。六世紀後半から七世紀中ごろのものとみなされる（図３－２）。

千歳市内では、ウサクマイＡ遺跡で一九六三年と一九六四年の発掘によ

り、十勝茂寄式の類が出土した。ウサクマイ地区ではB、C、N、ふ化場1等多くの遺跡からこの時期の土器が出土している。このほか末広、キウス5・7、美々8遺跡等市内全域に認められる。恵庭市西島松5遺跡（北埋調報二〇〇二）や上島松遺跡（恵庭市教委一九七四）ではこの時期の墓から多量の武器類が発見されている。同様な武器類の出土したこの時期の墓は江別市江別神社遺跡（江別市教委一九八二）、小樽市蘭島遺跡（小樽市教委一九九二）、余市町天内山遺跡等に認められる。時期は十勝茂寄式の後半から末頃のもので、七世紀前半から中頃と考えられる。この土器の分布は本州の青森県から十勝・釧路方面に及び、内陸では旭川市付近に達している。竪穴住居跡は知られておらず、焼土の認められることから、各領域内で季節的に狩猟、漁撈、採集のため移住しながら生活をしていたように思われる。太平洋沿岸ばかりでなく道南から道央部の日本海沿岸にも分布し、断片的には礼文島などオホーツク文化の遺跡からも出土する。



1：十和田式（泊内式）、2～4：十勝茂寄式
5：オホーツク式刻文土器、6：オホーツク式貼付浮文土器、7・8：条係文のあるオホーツク式土器

1・2：石狩市岡島洞窟、3：ウサクマイA遺跡、4：十勝茂寄、5：恵庭市茂漁8遺跡

（出典）1・2：浜益村『浜益遺跡』1961、3：ウサクマイ遺跡研究会『烏柵舞』1975、4：kidder 1957”The Jomomon Pottery of Japan”Antibus Aslae Ascona Switgland、5：恵庭市教委『茂漁7遺跡、茂漁8遺跡』2004、6：道埋文『ウサクマイN遺跡』北埋調報156 2001、7・8：『美沢川流域の遺跡群XV』北埋調報77 1991

図３－２　十勝茂寄式と道央部出土のオホーツク式土器

一方初期のオホーツク式に突瘤文を伴うことは戦前から注意されていたが、浜益村岡島洞窟で擦文A的な土器と伴うような出土状態が報告された（図3－2－1・2、大場一九六一）。オホーツク式系統の土器は十和田式の類と考えられていて、突瘤以外文様のないものも多い。サハリンの十和田式とはやや異なり、口縁の外反するもので刻文や沈線文のあるものも認められ、稚内市泊内遺跡（稚内市教委一九六四）で住居跡とともに発見されていることから、泊内式とも称している。この種のオホーツク式はその後の刻文を主体とするものへと続き、礼文島から、日本海側では現在奥尻島にまで知られている。オホーツク海沿岸では、稚内市から羅臼町、根室市等の道東、さらに択捉島にも及んでいる。十勝茂寄式やオホーツク式刻文土器には、土師器を伴うことがあり（宇部二〇〇九）、また、十勝茂寄式の分布する恵庭市の茂漁8遺跡で、完形のオホーツク式刻文土器が出土している（恵庭市教委二〇〇四、図3－2－5）。

七世紀後半の千歳市域にはそれまでの北海道的な土器とは異なり、本州系の土師器が出現する。この初期の集落はウサクマイ地区の遺跡、末広遺跡、祝梅三角山D遺跡、丸子山遺跡、キウス9遺跡等、各地区の十勝茂寄式の時期の遺跡の後を引き継ぐかのように展開している。

道内のこの時期の土師器の集落を伴う遺跡は、今のところ余市町、小樽市、札幌市、江別市、岩見沢市あたりから南、太平洋沿岸では厚真町あたりから西に限られている。

一方、オホーツク式の貼付浮文土器の時期の集落分布はオホーツク海沿岸を主としているが、日本海側では留萌市、太平洋沿岸では浦幌町あたりに達しているようである。礼文島では貼付浮文土器と共に沈線文のあるオホーツク式土器が認められ、サハリンの南貝塚式の類かと考えられているが土師器とも似ている。オホーツク海沿岸の枝幸町目梨泊（枝幸町教委一

九九四）、網走市二ツ岩、羅臼町トビニタイなどのこの時期の遺跡からは同時期の土師器も発見されている。またウサクマイN遺跡では完形のオホーツク式の貼付浮文土器（図３－２－６）が出土している（北埋調報二〇〇一）。

十勝地方の浦幌町十勝太の墓地の遺跡では、道央地方の土師器に似た土器とともに沈線文の多い土器が出土している。これらを十勝太式と称している。土師器風の土器は、道央の土師器と良く似ているが、土師器は褐色の土器であるのにこれは黒色を呈している。帯広市でも認められる（北沢一九八四）。

第二節　古代史と蝦夷

第一項　蝦　夷

古代の蝦夷に関する基本的な史料として、日本書紀の記事がある。これについては坂本太郎（一九五六）の研究があり、それぞれの記事について史料の性質が研究されている。それによると皇極元年の記事からほぼ事実として信用することができると考えられているが、記事によっては諸氏の家記によるものとか、造作によるとか信用の度合いを異にすることが考えられている。それらの中で、もっとも信用できると考えられるのは政府記録とみなされるもので、皇極紀の記事をはじめとして越の国に関する一連の記事がある。その内容は、越のあたりの蝦夷が数千人「内附」するところから始まり、その後渟足、磐船の柵を造り、阿倍比羅夫の遠征へと続くものである。その結末は持統天皇の代に渡嶋の蝦夷等が朝貢するところにあると思われる。

この七世紀中ごろから末葉にかけて、またその前後の時期に日本の北方においては何が起きていたのだろうか。坂本は、その発端を異族の侵入があったことによると解している。歴史の見方として民族興亡史という見方があったが、北海道に異族が侵入しさらにそこの人々が更に南方に侵入していく、そのような民族移動のような状況を想定されたのかもしれない。

この異族については、戦前一九三九年に喜田貞吉がオホーツク式土器を、書紀の粛慎人の遺物であろうと述べていた（喜田一九三九）。また戦後一九四七年に原田淑人はオホーツク文化が粛慎の文化ではないかと述べてもいた（駒井一九四八）。和田清は七世紀に中国東北部の靺鞨の人々が北海道にも居住していたと考えている（和田一九五四）。靺鞨（まつかつ）の文字は多賀城碑（図３－８）や続日本紀に見えていて、正倉院文書の記載から阿之波世（ア

シハセ）と読まれ、この読み方は書紀の粛慎の読み方と一致している（児島一九八四、寺島一七一二）。

このオホーツク式土器、あるいはオホーツク文化は、主として北海道の考古学研究者が解明したもので清野謙次、米村喜男衛、新岡武彦、河野広道、名取武光、後藤寿一等の調査により、土器型式の設定は一九三三年になされ、文化的な意義については一九三四年に後藤寿一が『考古学雑誌』に発表し、それが喜田らに認められたものであった（後藤一九三四）。

オホーツク式土器は非常に長い間使用されていたのだが、書紀の粛慎人の遺物はほぼ七世紀代のもので、オホーツク式のうち刻文土器と称される大陸からサハリン、千島に及ぶ一連の土器の時期がほぼ相当すると考えられるに至っている。この刻文土器の分布について、近年、道南の奥尻島に遺跡が発見され、六世紀代から七世紀中ごろまで居住者のいたことが知られた（道埋文二〇〇三）。

本州の北部では、六世紀には土師器を使用する文化が認められるが、その時期の土師器が北海道でも発見されている。オホーツク文化の遺跡でも、続縄文末期から擦文初期にかけての遺跡でも発見されている。本州北部の土師器には、北海道の続縄文土器の器形と似たものが認められるが無文である。北海道では続縄文土器の器形を継承し、それまでの縄文の代わりに沈線文による文様を主とする擦文土器が出現する。

六世紀代には明らかでないが、七世紀前半には東北地方の広い範囲に量は少ないが沈線文のつけられた土師器が出現する。これは北海道系の擦文土器使用者が、東北地方に南下したことを示しているようである。青森県（宇部一九九七）、岩手県（高橋信雄一九八二、高橋興右衛門一九九七、光井一九八七）、秋田県（高橋学一九九七）、さらに宮城県（村田一九九七）にあり、新潟県でも器形の特色から東北北部から北海道方面と関係があると考えられている資料が報告されている（春日二〇〇六）。この事例が、北部からの人々の南下を示すとすれば、皇極紀の記事はその意味を伝えているのではないかとも考えられる。

皇極紀には、元年九月条に「越辺の蝦夷数千内附」と記されている。この記事の意味するところは越の地域の北方からその境を越えて数千の人々が侵入してきて、服属することになったという意味であろう。現実にはその後の経過から見て、越の地域の北方には秋田、能代、津軽という蝦夷の地域があるのだが、それらの人々との戦闘の結果数千人を服属させたというような事件があった様子はない。むしろそれらの人々のところへ北方から数千人の人々が南下してきたことを考古学的な資料から考えられるのではなかろうか。実際には、一挙に数千人という人々が来たわけではなく、少しずつ来ていた人々が津軽から能代、さらに越の地域へと順送りに送り出されて、この頃までに数千人になってしまったということではなかろうか。この異常事態に越の豪族は、その地域での対応が出来ないことから中央政府に対策を要請したのではなかろうか。それが九月になって内附を認める決定がなされ、中央政府が対策を講じることになったことをこの記事は示しているのではなかろうか。

それらの人々を収容する施設を造るとか、処遇について対策を考えることになったのであろう。地域的な問題ではなく、国家的な問題となったのであろう。書紀の記事を坂本はそのように解したものと思われる。当時の中央政府はスムーズに政策を展開できる状況ではなかったかのようである。この対策が進行するのは大化の改新を待たねばならなかったようで、越の国に渟足の柵が完成し柵戸を置いたのは大化二年、磐舟の柵を置いたのは大化四年のことであった。その間にも、その後にも、大化二年、斉明元年に引き続き蝦夷の親附、内属が認められる。柵養の蝦夷という表現が

見られるが、これが内附した蝦夷の人々のことであろう。それに対して、越の民と信濃の民を選んで柵戸としたという記事がある。内附した蝦夷の居住地を柵で囲み、その周囲で警護にあたったものか、あるいは、農耕に馴れない蝦夷の人々に営農の指導を行ったものか、実際に柵の遺跡が発見されればその実態がより明らかになることと思われる。その柵養の蝦夷の生活は農業をするのでなければサケ漁などの漁業に従事していたことであろう。

政府としては、北方からの人々の南下について、本格的な対策を講じることを決定し阿倍臣を派遣したのであるが、その行程の中で大河の河口の海岸砂丘に一〇〇〇人ほどの蝦夷が仮屋に居住し、その代表が「粛慎が来て我等を殺そうとするので、そちらに仕えたい」と言ったと記している。これはそれまでの人々の南下、内附の原因が何であったかを明らかにしている。粛慎との戦闘で能登の臣は戦死したという。奥尻島青苗砂丘遺跡のオホーツク式の住居で子供の人骨が発見されているが、粛慎は敗れて己の妻子を殺したと書紀に記されている。戦闘のあったのは「弊賂弁之嶋（へろべのしま）の柵」であるが、これが今日の奥尻島南端の青苗砂丘遺跡と解されてもいる。

粛慎の代表者を捕虜として、そのほかヒグマを二頭連れて凱旋したとのことであるが、北海道の道央部から南部の要所には兵士を配置していたようである。余市町天内山遺跡、小樽市蘭島遺跡、江別市江別神社遺跡、恵庭市西島松五遺跡、同上島松遺跡などで、阿倍臣の遠征した頃の武器を副葬した墓が発見されている。

飛鳥に帰って、捕虜の送還など当面の戦後処理が決定されたものと思われるが、長年に亘る柵養蝦夷の処遇についても脅威のなくなった北海道への送還とか、東北各地に配置するとか、各人の意向も加味されたか、柵養という身分からの自活化が図られて行ったのではなかろうか。奥尻島まで分布していたオホーツク式刻文土器はこの頃を境に消滅する。

当面の戦後処理はどのように進められたのであろうか。この終戦を境として日本海側の島々をはじめ全道的に刻文系のオホーツク式土器が姿を消し、貼付浮文系のオホーツク式土器となるとみてよければ、どのように考えられるであろうか。この浮文土器は北海道と千島列島に分布するのみでサハリンには及んでいない。また、日本海側沿岸での分布は僅かである。オホーツク文化には外来系の靺鞨本体の人々と、在来の続縄文系の系譜を引く人々とが共存していたと考えられるが、この戦後処理の過程で外来者の送還が取り決められたのではなかろうか。在来者のオホーツク文化になじんだ人々は、そのなじんだ生活を続けながら新たに日本国に服属する靺鞨国の住民としての地位が与えられたのではなかろうか。それらの人々の文化が七世紀後半から八世紀代に認められる道東北の貼付浮文期のオホーツク文化であったのではなかろうか。

道央、道南では阿倍臣らと共に粛慎と戦った在地の人々は、正式に渡嶋蝦夷としての地位が与えられたとみられる。それらの人々の新たな課題として渟足や磐舟の柵で柵養されていた蝦夷の帰還、受け入れをスムーズに進める事業など戦後の地域社会の再生に取り組むことになったのであろう。本州で生活していた間に農耕になじむこととなったまだ若い人々は開墾用の鍬鋤の類、斧、鎌などとアワ、キビの種子あるいは当座の食料などを携えて道央から道南の縁故のある十勝茂寄期の人々の居住地へおもむき、開拓に取り組むことになったのではなかろうか。北海道への移住は本州で営農を学んだ人々の集団入植という形であったのであろう。千歳市末広遺跡（市教委一九八二）、江別市旧江別兵村遺跡（河野一九五九）、栗沢町由良（札幌西高一九五九）の遺跡では七世紀後半とみなされる多孔底の甑（こしき）が発見されている（図３－３）。新潟県では渟足・磐舟柵で使用されていた

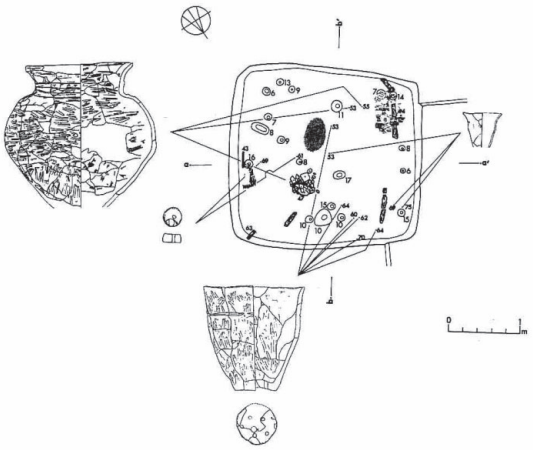


図３－３　甑の出土した竪穴住居と出土遺物
（市教委『末広遺跡における考古学的調査（下）』より）

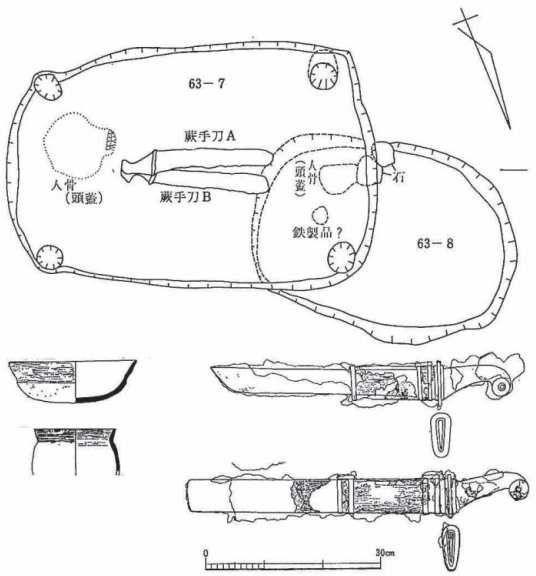


図３－４　ウサクマイＡ遺跡の墓と蕨手刀
（63－７）

と考えられている（春日二〇〇三）ものであるが、韓国でも出土している（金一九七二）ので、本来はそちらから伝わりその時期に使用されたものの様である。東北北部から北海道にかけて分布が認められるのだが、そのような器具は稲の実る越後では有用であっても稲の取れない北海道では不要のものであったらしく、道内ではこれまで三遺跡で三個発見されているのみで、その他の甑も稀である。住居の形態、土師器の使用、祭祀の方式等、また墓の造営もほとんど本州と変わらないのである。入植地は余市町、江別市、岩見沢市、恵庭市、千歳市、厚真町あたりまでが範囲であったようである。なお石狩川沿いに深川市あたりにまで延びていたかも知れないが、今後の調査で明らかにされるものと思われる。遠征時から戦後の兵士の駐屯地を中心にした入植地の形成がなされたのではなかろうか。当時渡嶋と呼ばれた北海道の蝦夷化した人々は持統十年紀の記事から見て、その代表伊奈理武志（いなりむし）を殖民状況の報告に上京させたものであろう。

さらに長期的な施策として諸外国からの侵略に対する再発防止策を講じることが必要であった。九州の防人のことは種々の記録や万葉の歌で知られるが、北海道でも同様なおそらく在地住民を主体にした防衛組織が編成されていたと考えられ、それは北海道南部でも北部でも同様に実施されていて、八世紀前半期とみなされるウサクマイ遺跡群の墓地（図３－４）などから発見される蕨

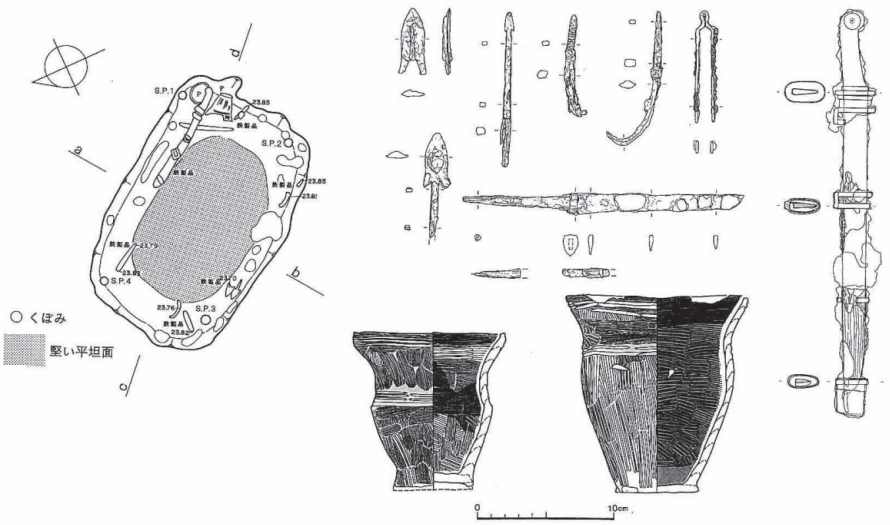


図３－５　西島松遺跡の墓（Ｐ101）

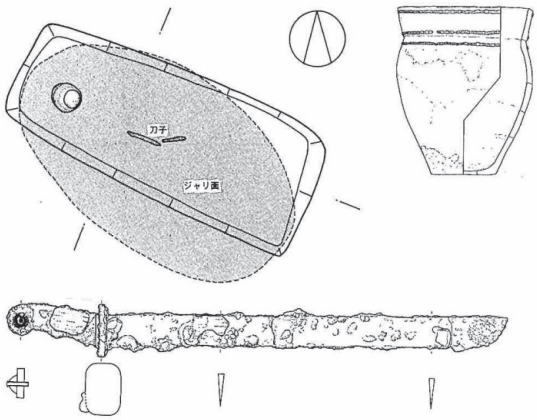


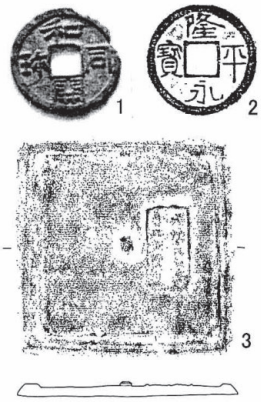
図３－６　目梨泊遺跡のオホーツク文化期の墓

手刀の分布がそのことを物語っているようだ。恵庭市西島松５遺跡Ｐ－一〇一の墓（図３－５）ではこの時期の鉄鏃も出土していて、武器の一端が知られる（北埋調報二〇〇二）。オホーツク海沿岸のオホーツク文化の墓から出土する蕨手刀（図３－６）と伴う鏃は石鏃である。この頃の本州と北海道との間の人員の輸送や物資の運搬を一手に取り仕切っていたのが渡島津軽津司であったのであろう。その事業は、秋田城が整備されるとそこに引き継がれたものであろう。恵庭市出土の「和同開珍」「隆平永寶」（図３－７－１・２）、七六二年に建造された宮城県の多賀城碑（図３－８、安倍・平川一九九九）にある「靺鞨国」の文字はこの間の本州と北海道の通交を示している。

第二項　擦文中期の文化

道央部では、それ以前の土師器の文化から中期の擦文文化への移行が九世紀に進み、やがて一二世紀頃の擦文後期の文化へと転換していく。この時期には文様の華やかな深鉢形土器や浅鉢形土器などが出現する。道央部の中期擦文文化では農耕がある程度定着して本州からの補給が途絶え、自立した生計を立てる方向へと転換を余儀なくされ、人口も減少したことが考えられる。農耕に加えて漁業が主たる生業であったようだ。鉄器の加工もなされている。東北北部から九世紀前半には秋田県の須恵器、一〇世紀頃には青森県津軽地方の須恵器が入ってくる（図３－９）。

八世紀の東北地方の蝦夷との戦争が一段落すると、出羽国では内政の充実を図る方向に政策の重点が移行し、それまでは渡嶋蝦夷・蝦狄の朝貢がなされていたのであるけれども、九世紀には北海道の人々を渡嶋狄と表記し、私的な交易を主とする方向へと転換し中央豪族や東北地方の在地豪族との個別的な結びつきが強まり、公的な制度としての蝦夷の扱いは廃れていくとみられる。東北北部の大部分の人々は国の支配を受ける内民化した俘囚等となり、それ以外の直接国の支配が及ばないより北方の人々をさす言葉として夷地・夷人という言葉が一〇世紀には使用されることとなる（北構一九九一）。北海道は九世紀から実質的に夷地



１．和同開珎、２．隆平永寶、３．湖洲鏡

図３－７　和同開珎・隆平永寶と湖洲鏡（『材木町５遺跡調査報告書』1989より）

図３－８　多賀城碑の拓本
（安倍辰夫・平川南『多賀城碑－その謎を解く（増補版）』）

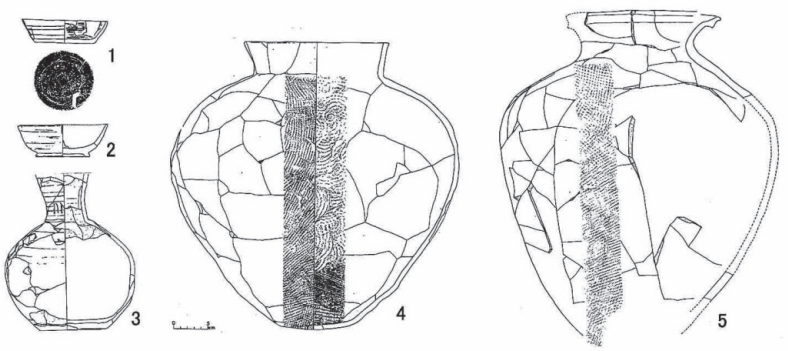


図３－９　末広遺跡出土の９・10世紀の須恵器

化を始めていたようである。市内のウサクマイＮ遺跡出土の富壽神寶という貨幣（北埋調報二〇〇一、口絵）は、朝貢制度が機能していた九世紀初期の遺物と見るよりも私的交易の定着した時期の遺物とみなされるのではなかろうか。恵庭市の茂漁川沿いの遺跡で「和同開珍」と「隆平永寶」が出土しているところから、八世紀にはその地域の有力者が秋田城などへ朝貢に出向く慣わしであったことが考えられるのだが、その伝統がこの時期には絶えていたかのようである。ウサクマイ地区の有力者が出羽の秋田、あるいは酒田などに出かけて入手したものかも知れない。本州との関係が、国家的なレベルでの扱いから、私的な非公式な関係へ、政治的、軍事的な関係から経済的な関係へと転換したようである。道内ではそれまで蝦夷と粛慎・靺鞨として居住地や活動地域が区別されていたのが、その規制がなくなり二者の融合が進行するように思われる。

道北の元地式は礼文島の元地遺跡、上泊遺跡、香深井遺跡群などから出土しているもので、器形は擦文土器と似ているが器壁が極めて厚い土器である。なお資料が少なく今のところ実態が不明である。礼文島には貼付浮文土器の時期にオホーツク式の沈線文土器が存在していた。その系譜を引くものであろうとは思うがサハリンの土器とも似ている。全体として量が多くないのかも知れない。これと文様が似ているけれども、器壁の薄い土器が美々７遺跡で出土している（図３－２－７・８、北埋調報）。

道東ではトビニタイ式という擦文土器の形をしているが貼付浮文土器の系譜を示す土器が一二世紀頃まで擦文土器と共存している。九世紀代のものは標津町カリカリウス遺跡で出土していて、ウサクマイＢ遺跡の擦文土器と同様なものが伴っている。その後女満別町元町遺跡などで中期後半の擦文土器と共存している（標津町教委一九八二）。オホーツク海沿岸でも常呂地区の遺跡ではトビニタイ式よりもむしろ中期の擦文土器そのものが存在していて、トビニタイ式は十勝、釧路、根室地方の道東から南千島に多く存在している。これらと

図３－10　チプニー２遺跡の墓
（道埋文『チプニー２遺跡（２）』北埋調報207　2003）

共存する中期擦文土器の母体は前期の十勝茂寄式の系譜を引く十勝太式と考えざるを得ない。

擦文中期の遺跡と遺物

千歳市の中期擦文文化の代表的な遺跡は千歳神社裏遺跡である。河野広道氏により発掘されたのは一九三一年十月で、出土した深鉢は直ちに復元され、十月中旬から下旬に札幌の植物園内の博物館で開催された「第一回北海道先史時代遺物展覧会」に「大形刻紋土器」として出品された。一九三二年一月にはその目録に写真が掲載されている（北大博物館・犀川会一九三二）。その後、一九三二年五月に東京で出版されている学術雑誌に「深鉢型擦紋土器」と称すべきものであるとして報告された（河野一九三二）。一九三三年二月には東京の雑誌『ドルメン』に写真が転載され、同年六月には北海道原始文化展覧会に出品されて、その図録にも掲載され、全国的に有名になり、後には海外からも注目されている。擦文土器が有名になったことから刷毛目のある擦文土器は土師器とみなすべきであることを小林行雄が指摘し、刻文のある土器を擦文土器として坪井清足が解説していた（小林一九五九、坪井一九五九）。戦後の駐留米軍のマッコードが田中遺跡で竪穴住居跡を発掘し、アメリカで報告されている（ＭａｃＣｏｒｄ一九六〇）。この遺跡の土器は中期から後期のものと見るのが良いのではなかろうか。炭素による年代測定がなされ一一〇〇±一六〇年前と報告されている。一九六三年には大場利夫等により、蘭越遺跡の調査が行われ、中期末頃の竪穴住居跡が発掘されている（大場他一九六七）。一九七三年には石附喜三男によりウサクマイ地区の調査が実施されている（石附一九七四）。石附は擦文文化の研究をテーマとし、資料の編年を行い歴史的意義を考えたのだが、千歳市内の資料を多く利用している。千歳神社裏の土器を初期の擦文土器と考え、それ以前にウサクマイＢ遺跡や同Ｎ遺跡の土器の類を位置付け、それを第Ⅰ期、千歳神社のようなものを第Ⅱ期とし、以下第Ⅵ期までの序列を考えている（石附一九八四）。土師器の文化をその前に置いていてその時期を八世紀、Ⅰ期を横走する沈線のあるものとして、八世紀末から九世紀前半の年代と微妙な表現をされていた。Ⅰ期のウサクマイＮ遺跡の横走沈線文のある資料には、糸切痕のある土師器などを伴うことから九世紀前半とみなされ、石附のⅠ期の後半とも言えるのだが、今はここから中期の擦文土器としてほぼ八九世紀の間で前期中期を区分している。Ⅰ期の前半に相当する八世紀代の土器の類は前期の土師器に含めて扱っている。今では石附が想定した初期の姿とはその内容が大きく異なってきている。Ⅲ期には口縁に綾杉状の楔形列点文のあるもの、Ⅳ期には末広ＩＨ－五五竪穴の資料等が当てられていて、ここまでが中期の範囲に入る。大まかにみて、Ⅰ・Ⅱ期が中期前半、Ⅲ・Ⅳ期が中期後半に相当する。市内で集落をなす竪穴住居跡は末広遺跡に各時期のものが認められる（大谷一九八二）。末広Ⅰ類が前期後半、Ⅱ類ａ・ｂ１が中期前半、同ｂ２が中期後半にほぼ相当する。美々８遺跡は、竪穴住居跡がきわめて少なく、焼土が非常に多い遺跡で、

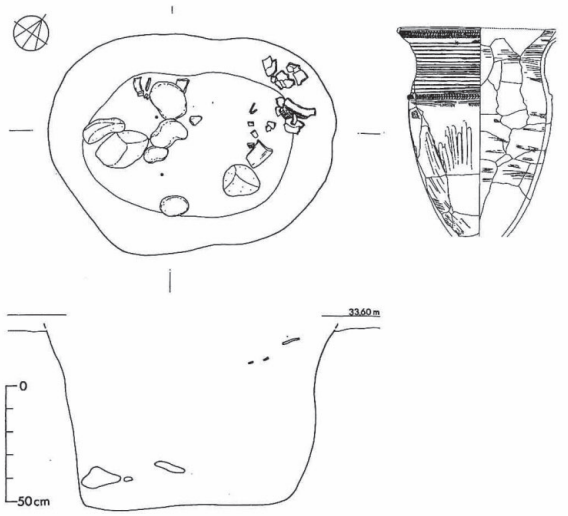


図３－11　ウサクマイＣ遺跡の墓
（市教委『ウサクマイ遺跡群の考古学的調査』1979）

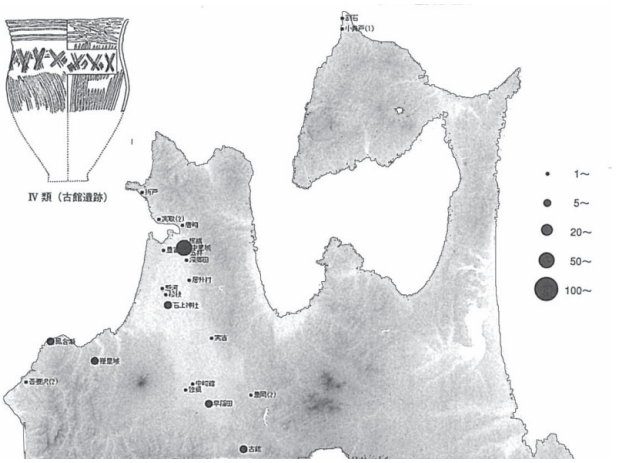


図３－12　東北北洋の擦文土器の変遷と分布
（斎藤淳「本州における擦文土器の変遷と分布について」『海と考古学とロマン』から、擦文土器後期後半に相当しそうなグループの分布図を示したもの）

土器が擦文文化の初頭から終末までほとんど途切れることなく多量に出土している。千歳地域から太平洋へ通じる主要な船乗り場であったらしく、人員や物資の集結、集荷場所となっていたのではなかろうか。

墓地はチプニー２遺跡で伸展葬とみなされる例があり、鍬先など鉄製品が副葬されていた（図３－10、北埋調報二〇〇二）。中期前半の末頃とみなされる。ウサクマイＣ遺跡では円形プランの深い穴に屈葬されたとみなされる例がある（図３－11）。時期は中期後半である。

末広遺跡をはじめ、中期の遺跡から須恵器が多く出土し、九世紀前半には秋田城付近の製品が多く、一〇世紀前後には津軽の製品が渡来している。津軽では近年詳細に窯の調査が実施されていて概要が知られる（藤原二〇〇七）。この窯跡は青森県五所川原市前田野目にあり、生産期間は一〇世紀頃と考えられている。現在四〇基ほどの窯跡が発見されていて、前期二六基、後期一四基とされている。初期には食膳具が多く、後期には大形の甕（図３－９－５）の生産が多くなると考えられている。現在、窯跡の調査は進められているが、それと関連する工人組織や、その集落、主たる供給地など全体的な関連性がよく分からない状況である。年代についても仮定的で、今後より一層厳密な調査が求められるであろう。

第三項　擦文後期の文化

後期の年代を示す資料はあまり多くないが、その例として釧路市材木町五遺跡から出土した方形の湖州鏡（図３－７－３、釧路市教委一九八九）がある。これは後期後半の時期の住居跡から発見されているので、後期後半の年代が一二から一三世紀とされる鏡の年代（久保一九九九）に相当することが考えられ、仮にその年代を一二〇〇年頃とすると、それ以前の後期前半の時期は一一〇〇年頃と考えられるのではなかろうか。このような目安で、後期前半を一一から一二世紀、後期後半を一二から一三世紀と考えておきたい。後期全体としては一一世紀後半から一三世紀にかけてとみなすこととなる。

あまり須恵器を伴わず、漆器などが取り入れられて土器から木器への転換が進んだ時期と見られる。また鏡、刀剣など、本州産物の流入が多くなった時期と考えられ、土器は最後に深鉢形だけが残るが、それが土鍋に転換すると擦文土器の時代は終わるとみなされる。

後期前半の時期の遺跡では装飾文様のある高坏形の土器が多く認められる。深鉢には綾杉状の沈線文などが幅広く施されたものが多く、道南から青森県にも及んでいる。市内では末広遺跡、ユカンボシＣ15遺跡、丸子山遺跡、梅川３・４遺跡、チプニー２遺跡、美々８遺跡に認められるが、美々八遺跡とチプニー２遺跡にややまとまっていて他は断片的である。後期後半の遺跡は末広遺跡、ユカンボシＣ15遺跡、オサツ２遺跡、キウス５遺跡、美々８遺跡に認められる。土器の文様の施される幅がせまくなるとみなされる。なお京都国立博物館には、この時期の深鉢形土器が収蔵されている。

千歳演習場出土とされていて（京都国博一九九四）、一九五四年頃に出土していたものと思われる。

後期の遺跡は道央部にも道東、道北にも広く認められるのだが、竪穴住居からなる集落は海岸に近い河口付近か大河川中流域に集中するようで、その他の内陸部では大規模な遺跡は少ないようである。斜里町須藤遺跡（斜里町教委一九八一）では後期前半期の住居にトビニタイ式の新しい時期のものが伴っていた。同様の状況は根室、釧路地方でも認められるが、後期後半の集落ではトビニタイ式の系譜をとどめるものはほとんど認められなくなる。かまどのある方形プランの竪穴住居跡が道東の縁辺まで分布するのが後期後半の時期である。

道南では後期前半期の土器は存在するが、まだ集落跡などは認められない。多いのは、それらの前半期のものよりは新しい、後半期に相当する集落で、松前町札前遺跡をはじめ各地で認められている。鍛冶をしている例が多い。奥尻島青苗貝塚ではアシカやアホウドリの骨、アワビの貝殻なども発掘されていてエゾと呼ばれた夷人の姿が知られる（佐藤一九七九）。

青森県で知られている擦文土器の分布は時期により違いがあるとみなされるが、後期後半の土器は津軽地域に広く分布し（図３－12、斎藤二〇〇二）、北海道における日本海沿岸の檜山地方の分布とあわせてみるとき、その範囲が津軽安藤氏の権益の範囲を示しているように思われる。これが鎌倉政権のエゾ管領と言われた安藤氏の直接支配地であるとすると、その範囲あるいはその周辺での珠洲製品の分布、あるいは流刑者の移送、また鏡や内耳土器などの流入がここの人々の手によって津軽地方から運ばれ、道内に広がり、さらに各集落での鍛冶の作業などあらたな中世的世界の形成が推進されて行ったことが推測される。

第四項　中　世

陶磁器と出土銭

近年の発掘調査により陶磁器資料が増加しており、中近世期の道央部における陶磁器類の一端が明らかになってきている。千歳においても、日本海に向かって流行する千歳川本流の河岸に立地する末広遺跡から、一五世紀前半の珠洲産擂鉢（すずさんすりばち）、瀬戸美濃産天目茶碗、一六世紀の瀬戸美濃産灰釉（かいゆう）小皿、中国製染付皿や線描き蓮弁文をもつ青磁碗、一七世紀前半の越前産擂鉢などが出土している。また、太平洋に流れる美沢川の河岸に立地する美々８遺跡においても末広遺跡と同様の陶磁器類が出土している。

このほかに、旧長都沼周縁部に立地するチプニー２遺跡で一四世紀後半から一五世紀前半の蓮弁文をもつ中国製青磁碗、トメト川３遺跡で一六世紀後半の唐津産擂鉢、釜加遺跡で一七世紀後半の備前系片口擂鉢（写真３－１）などが出土している。

出土状況を見ると末広遺跡や美々８遺跡のような器種や生産地、生産年代が異なる複数の資料を出土する遺跡と、チプニー２遺跡のように単独で出土する遺跡に大別できる。前者の末広遺跡では和人の女性と思われる墓があり、美々８遺跡は交易の拠点として利用された遺跡である。

両遺跡とも和人が居留していた可能性が極めて高く、和人文化との密接な関係が考えられる。一方、チプニー２遺跡やトメト川３遺跡ではアイヌの住

写真３－１　釜加遺跡出土の備前系片口擂鉢（17世紀後半）

居（チセ）跡から単独で出土しており、アイヌ文化の中で使用法の検討が必要である。

出土した主な銭貨は、中世から近世初頭にかけて本州で流通した渡来銭と呼ばれる北宋の皇宋通宝・熙寧元宝・元祐通宝などや、明の洪武通宝・永楽通宝である。

末広遺跡からは、二〇枚がつづられた緡銭（さしぜに）の状態で出土しており、貨幣経済を背景に活動していた和人の存在を窺わせる。アイヌ文化では、銭貨は墓からの出土する例が多く、貨幣としてではなく装飾品の一部や、緒締め金具などに利用されていた。今のところ、中近世の対和人や渡海交易などに伴うアイヌの銭貨使用の実態は不明である。